

## 第一章：「論語」と時代背景 古代聖王から周王朝の東遷まで

子曰わく、学びて時にこれを習う、亦た説まばしからずや。

朋ともあり、遠方より来る。亦た楽しからずや。

人知らずして慍うらみず。亦た君子ならずや。 (学而第一の一)

(先生が言われるには、「色々学んで、機会あるごとにおさらいをする。理解が深まって喜ばしいことだね。気のあった仲間が遠方から訪ねてきてくれて話がはずむ。楽しいことだね。他人が認めてくれないからといって腹を立てない。これ又君子じゃないか」と)

おそらく皆さんも一度は聞いたことのある、「論語」の一番初めに置かれた、孔子が晩年に言ったとされる言葉です。波乱万丈の生涯を振り返り、今しみじみとした実感をもって、弟子たちを前に燕居して語る孔子の姿が鮮やかに彷彿してきます。学び続けること、そして人それぞれがそれぞれの役割に徹して生きること、そこに人生の生き甲斐や価値を見出した孔子の言葉は、いつの時代にあっても爽やかな風韻を私たちに届けてくれます。

「論語」は孔子とその弟子たちの言行録を、孫弟子たちが選んで討議、編纂した語録集で、全部で二十編、約五百章の短い断片的な文章から成っています。それは主人公である孔子の言葉であったり、孔子の弟子たちの言葉であったり、あるいは孔子や弟子たちの行動記録であったり、歴史上の人物批評であったり、当時の彼らを取り巻く人々の言動であったりします。

美しい詩的な響きを持った名言名句に溢れ、力強い文章に元気付けられ、一寸した言葉に考えさせられ、時には現代と比較して反論したくなり、年齢や経験を経て再読すると或る一章の言葉の真理にハッと気付いたり、そして又、皆さんのよく知っている言葉の語源にも出くわします。とにかく読むたびに新しい発見のある、汲めども尽きぬ思考の源泉となる書物です。

二十篇のそれぞれの「篇」には「学而篇」「憲問篇」「堯曰篇」といった篇名がついていますが、これを普通、「学而篇」は第一番目の篇だから「学而第一」、「憲問篇」は第十四番目だから「憲問第十四」、「堯曰篇」は二十番目にあるから「堯曰第二十」などと表します。

各編には「章」があって、「堯曰第二十」は五章だけ、「憲問第十四」には四六章もありと、その数はバラバラで、かつ章立てそのものにも学者の諸説紛々です。今回は岩波文庫の「論語」(金谷治訳)をベーステキストにして、その章立てに従います。そして、たとえば「学而篇の第五章」の文章は、「学而第一の五」と表記することにします。皆さんが後で原文をトレースする際の検索に便利だろうと思ってのことです。なお、篇名は現在の我々の書物のように、その篇の内容を表したのではなく、各篇の第一章の出だしの二字ないし三字をとってつけたものであることも、頭の隅に記憶しておいてください。

さて、「論語」が我が国に伝えられたのは、中国大陆から朝鮮半島を経てのことで、応神天皇の十六年（西暦二八五年）に百済の和邇吉師<sup>くたろ わにきし</sup>という学者が来朝し、「古事記」には、そのとき「論語」十卷、「千字文」<sup>せんじもん</sup>一卷併せて十一巻を天皇に献上したと書かれています。

その後急速に普及し、聖徳太子は仏教や「論語」の教えを取り入れた「十七条の憲法」を定めて新しい政治理念を掲げ、奈良時代から平安時代には、空海や最澄といった名僧や学問の神様と称された菅原道真公などの文化人が耽読し、孔子学派の教えすなわち「儒教」の専任の明経博士が置かれ、貴族たちの間に流布し、天皇自ら「論語」を講義することもありました。そして鎌倉時代には五山の僧侶たちがそれを伝え、江戸時代には徳川家康が儒学を国学に据え、それを機に一般庶民の間にも広く知られるようになりました。各地の寺子屋で「子曰<sup>しのたま</sup>わく、・・・」と素読の唱和がなされるようになったのです。

それは幕末の志士たちは勿論のこと明治時代にも受け継がれ、文豪、夏目漱石、森鷗外、キリスト者の内村鑑三、儒教を批判した福沢諭吉等々、みな「論語」を暗誦するほど熟読していました。このように皆さんがご存知の歴史上の偉人たち、皇族、氏族、そして僧侶、はては農・工・商の庶民たちもと、とにかくすべてといってよいくらい広汎な階級の人々に読まれました。「論語」に盛られた人間主義に基づく常識的で簡易公正な思想が、処世上の規範となり、現実を生き抜く生活信条の糧となって、多くの人々の共感を呼び起こしたからに相違ありません。

江戸時代の有名な儒学者、伊藤仁斎は、「知りやすく、行いやすく、<sup>かたよ</sup>偏らない正しいもので、親切丁寧なものの中にこそ、かえって万世不易<sup>ばんせいふえき</sup>で天下の最高に達する真理がある。それが『論語』である。だから『論語』は最高至極、宇宙第一の書だ」（「童子問」）と絶賛しました。

御本家の中国では当然「論語」にまつわる逸話に事欠きません。たとえば、「貞観<sup>じょうがん</sup>の治<sup>ち</sup>」で知られる中国史上最も栄えた国家である「唐」が衰亡し、その後乱立した五代十国の戦乱に終止符を打ったのが趙匡胤<sup>ちやうきん</sup>という人で、「宋」という国を建国しました。その宰相（大臣）として政治に携わったのが趙普<sup>ちやうふ</sup>。彼は、太祖である趙匡胤と二代目の太宗に仕えた人で、「論語」を大変愛読し、それによって政治を行ったと言われる人です。

< 趙普は常に一冊の書物を手離さなかった。朝廷で閣議があるときには、必ず出朝する前に部屋の戸を閉じ、<sup>はこ</sup>筐からその一冊を取り出し、正座して<sup>えつどく</sup>閲読してからでかけた。彼が亡くなって、家のものがその筐を開けてみると「論語」だった。そのくらい「論語」に執心していた。 趙普はあるとき太宗に言った。「私には一部の『論語』があります。その半部で太祖をお助けして太祖は天下を平定されました。残りの半部で陛下をお助けして太平の世の実現を目指します」と。（「十八史略」）>

このようにかつては政治に携る人々は勿論のこと、詩人の杜甫、陶淵明など文化人たるものすべてが必須の教養書として耽読し、「論語」に出てくる言葉そのものが何の注釈もな

く引用されるくらい常套語<sup>じょうとうご</sup>として頻繁に彼らの詩文に使われました。従って中国の他の古典を読もうと思ったら、「論語」の重要な章句を暗記するくらい熟知していないと、ある文章や詩句の意味が理解できないほど常識化してしまっています。

田園愛国詩人として知られる南宋の詩人陸游<sup>りくゆう ほうあう</sup>（放翁）は、「若かりし頃、あらゆる書物を読まんとして、汗牛充棟<sup>かんぎゅうじゅうとう</sup>（牛が汗をかくほどの重さと、棟につかえるほどの量）の書物を買ひあさり読んだ。しかし晩年になった今、『論語』を読んでいて、『論語』一冊が今まで読んだ数万巻を凌駕<sup>りょうが</sup>することに気が付いた」（「論語を読む」）とうたっています。まさに「論語」は万人が挙げる「座右<sup>ざいゆう</sup>の書」の中でも「聖書」と並ぶ随一の古典だと言っても過言ではありません。

さて、「論語」の主人公である孔子は、後述する「周王朝」が次第に衰えて、諸侯が覇権<sup>はけん</sup>を競い戦争が絶えなかった、中国史で「春秋時代」と呼ばれる多難な時代の、紀元前五五二年（或は五五一年）に魯国の陬<sup>そ</sup>というところで生まれ、紀元前四七九年に死去しました。享年七十四歳でした。

一般にインドの釈迦、中国の孔子、ギリシャのソクラテスそして北パレスチナ・ナザレ出身のキリストを「世界の四聖」とか「人類の教師」と呼びます。孔子と他の聖人の在年を比較すると、釈迦は、生年に諸説ありますが、紀元前五六六年生誕説をとれば十五歳くらい兄貴分、ソクラテスは紀元前四七〇年頃の生まれで、釈迦や孔子の晩年に生まれています。イエス・キリストがかなり年下の弟分になります。

釈迦・孔子・ソクラテスを「三大聖人」と称しますが、この「三大聖人」が紀元前五、六世紀に世に出て、それぞれが仏教、儒教、ギリシャ哲学の祖師として、連綿と今日まで大きな影響を与え続けているということは不思議であり驚異なことです。なぜなら紀元前五、六世紀といえば日本は縄文時代にあたります。人々は草ぶきの屋根をかけた竪穴住居に住み、小規模の稲作を始めたばかりで、カキを養殖し、魚漁や隣村との交流に丸木舟を用いていた時代です。中国やギリシアで都市国家の萌芽が見られた時代に、我が国ではまだ神殿を作り祭祀を行うだけの原始的な巫女による政治が執り行われていた頃ですから。

では、孔子の生きた紀元前五、六世紀とはどんな時代だったのでしょうか。司馬遷<sup>しばせん</sup>が著した「史記」や、曾先之<sup>そうせんし</sup>の著わした「十八史略」等から故事を拾って、中国の古代伝説時代から孔子の生きた春秋時代までをざっと概観してみましよう。「論語」にたびたび登場する歴史的人物の理解や、孔子の思想的背景を知る上で役にたつはずで。

中国では、今からおよそ四千年も前に、漢民族が中国北部を流れる黄河流域で農耕や牧畜を営み、農耕文化を発祥させました。その後伝説では天皇氏<sup>てんこうし</sup>、地皇氏<sup>ちこうし</sup>、人皇氏<sup>じんこうし</sup>、有巢氏<sup>ゆうそうし</sup>等の聖王が現れ、次いで燧人氏<sup>すいじんし</sup>は火をおこして料理することを伝え、伏羲氏<sup>ふくぎし</sup>が家畜の保護や易、礼式を教え、神農氏<sup>しんのうし</sup>は農作や商業・医薬のことを教えたとされます。彼らを「三皇」と呼びます。そして当時の中国をはじめて統一したと伝えられる黄帝<sup>こうてい</sup>を筆頭に「五帝」と

称される聖天子が理想的な太平の世を築いたといわれています。特に後世まで語り継がれ、孔子学派の理想的聖天子像として仰がれ、治世の模範を示したとされるのが有名な堯・舜が統治した「唐・虞の時代」です。

### 【堯帝の治世 天下泰平】

堯（陶唐氏）という聖天子は、「その仁は天の如く、その知は神の如く、これに就けば日の如く、これを望めば雲の如し」といわれるほど仁徳や知徳にすぐれ、近づけば太陽のような温かみがあり、遠く望めば天を覆う雲のように威厳があったということです。

天下を治めること五十年。一体民衆が自分の政治に満足しているのか不満なのか、周りの家臣に聞いても朝廷の役人に聞いても分からない。そこでおしのび姿で街や村を回って、自分の目で確かめにでかけました。街では子供のはやり歌に「今日もこうして無事に暮らせるのは、堯帝様のおかげです。あなたの徳の深いこと」と歌うのを聞き、村では老人が口に食べ物を含んで腹鼓をうち、足で地面を打って調子を取りながら次のように歌うのに出会いました。「日が出りゃ働き、日暮れにゃ憩う。のどが渴けば井戸掘って水飲み、腹すきゃ畑を耕し食うだけさ。天子のおかげが何あろう」。

すなわち世は天下泰平で、子供も老人も太平を謳歌していることを知って安心したということです。尚、この老人の故事は、「十八史略」の原文が「鼓腹擊壤（腹を鼓うち、壤を撃つ）」とあることから、「鼓腹擊壤」と音読みして、現在でも「太平を楽しむさま」（広辞苑）の意味に用いられています。

こうして堯帝の時代は、堯帝の悠遠広大な徳に感化され、聡明叡知な手本に天下の万民が知らず識らず従って、役人は適材適所に用いられ、庶民の一家はみな仲睦まじく、各自が自分の勤めに天分を発揮して生活を満喫し、つまらぬ争い事は起きなかった、ということです。「論語」に孔子が堯帝のことを褒め称えた文章があります。

子曰わく、大なるかな、堯の君たるや。巍巍として唯だ天を大なりと為す。唯だ堯これに則る。蕩蕩として民能く名づくること無し。巍巍として其れ成功あり。煥として其れ文章あり。（泰伯第八の十九）

（先生が言われるには、偉大だねえ、堯の君主ぶりは。巍巍（堂々）としてただ天を大なりとして、それに見習われた。蕩蕩（のびのび）として人民には言い表しようがない。堂々として成功（立派な業績）をおさめ、煥として（輝かしく）文章（文化）を定められた、と）

### 【舜帝の治世 修己治人】

次に堯帝の後を継いだのが舜帝（有虞氏）です。舜帝がまだ卑しい身分で、歷山という

ところで農耕を営んでいた時、人徳がことさら優れていたため、歴山の者はみな感化されて境界の畦を譲り合い、<sup>らいたく</sup>雷澤というところで獵師をしていた時には、みな漁場を譲り合うという具合で、舜のいるところは必ず人が集まってきて、一年で村となり、二年で町となり、三年で都市となったほどでした。

又、舜の父は意地悪い頑固者で、舜はこの父親と、再婚した継母とその子（弟）にさんざんイジメられました。倉で壁塗りをやらされ火をつけられたり、井戸掘りをさせられ上から土をかぶせられたり、九死に一生を得る危険な目にたびたびあわされました。しかし舜は怨むことなく親孝行に努め、兄弟愛を貫きました。こうした孝心が天を動かしたのでしょう。堯の目に止まり、周りからの推挙を得て、堯の娘を娶って天子の位につきました。

堯には丹朱という子供がおりましたが、不肖の子（親に似ぬ愚かな子）だったので、帝位を譲りませんでした。このように帝王がその位を<sup>ちやくけい</sup>嫡系の子孫へと<sup>せしゅう</sup>世襲せずに、有徳者に譲ることを<sup>ぜんじよう</sup>禪譲といいます。堯帝が舜に位を譲った時の諫めの言葉が「論語」<sup>ぎようえつへん</sup>堯曰篇に載っています。

<sup>ぎようい</sup>堯曰わく、<sup>なんじ</sup>ああ、<sup>なんじ</sup>爾舜よ、<sup>まこと</sup>天の曆数（運命）、<sup>ちゅう</sup>爾の身にあり。允に其の中を執れ。四海困窮せり。天禄永く終えん。（堯曰第二十の一）

（舜よ、天の定めによって、帝位につくべき時がきた。いずれにも<sup>かたよ</sup>偏らぬ中（中庸）を守り行え。四海は困窮している。天の恵みの<sup>とわ</sup>永久に続かんことを）

さて、「論語」に、「舜、臣五人ありて、天下治まる」（泰伯第八の二十）とあります。舜は<sup>う</sup>禹や<sup>しよく</sup>稷、<sup>せつ</sup>契、<sup>こうよう</sup>皋陶、<sup>はくえき</sup>伯益といった名臣をはじめ、たくさんの賢人を採用して善政につとめました。又、彼自身いろいろな人から意見を募り、堯帝の諫めの言葉に従って、あらゆる意見の中で最も<sup>じぎ</sup>時宜を得たものを採用して万民の幸せを実現しようと試みました。

孔子の孫の子思が著したとされる「中庸」という書物にも、孔子の言葉として、「舜は大知というべきだろう。舜は質問することを好み、たとえ卑近な言論でもないがしろにせず、善きも悪きも総て<sup>そじよう</sup>俎上にあげ、その中から最も T・P・O（時・所・状況）に適った意見を採り上げて政治に活かした。これこそ舜の舜たるところだ」と舜の大知を絶賛しています。世の人々は彼を「大舜」と呼びました。「論語」に「五弦の琴を弾じ、南風の詩を歌い、しかして天下治まる」（十八史略）と伝えられた舜の大度量ある統治ぶりが記載されています。

<sup>し</sup>子曰わく、<sup>い</sup>無為にいて治まる者は其れ舜なるか。それ何をか為さんや。己を<sup>うやうや</sup>恭しくして正しく<sup>なんめん</sup>南面するのみ。（衛霊公第十五の五）

（先生が言われるには、「賢人を選んで彼らに任せて、無為（よけいなことはしない）にして国を治められたのは舜くらいなもんだ。一体、何をされたろうか。ただ御身をつつしんで南面（政治をとる位置に座すること）していただけた、と）

堯・舜のような優れた古代の聖天子は、「修己治人<sup>しゅうこちじん</sup>」又は「修己安人<sup>しゅうこあんじん</sup>」と言って、「修己」すなわち自分の徳を磨いて知・仁・勇という「天下の達徳」を備え、「治人」「安人」すなわち万民に広く施し、万民の幸せのために統治することを唯一無二の使命としました。その背景には、天命を受けて天下を治めながら、もしその家（姓）に不徳な者が出れば、他の有徳者が天命を受けて新王朝を開くという「易姓革命<sup>えきせいかくめい</sup>」と呼ばれる政治思想がありました。（天命が<sup>あらたま</sup>革<sup>かな</sup>ることを革命といいます）

孔子の理想も、戦乱で秩序の乱れた春秋時代であって、実現することは至難な業ではあるが、堯・舜のような聖徳の君主が統治して、天下万民に博く施す世の中を甦らせたい、人間としての道に<sup>かな</sup>適った世の中の実現に微力を尽くしたい、の一心にあったようです。皆さんもよく御存知の次の言葉は、そうした孔子の究極の願いを込めた慨嘆です。

子曰わく、朝<sup>あした</sup>に道を聞かば、夕べに死すとも可なり。（里仁第四の八）

（孔子先生が言われるには、朝に立派な君主が現れて、道のある世の中があるのを見届けることができたなら、夕方に死んでも悔いはない、と）

ですから、古参弟子の子路や子貢たちが、「自分を磨いて、万民をひろく施して大衆を救うことができたなら一人前ですか」とあまりにも気軽に訊ねた時、孔子はキツとなって言いました。

己<sup>おの</sup>を脩<sup>ひやくせい</sup>めて以て百姓<sup>ひやくせい</sup>を安んずるは、堯・舜も其れ猶<sup>な</sup>お諸<sup>こ</sup>れを病<sup>や</sup>めり。（雍也第六の三十、憲問第十四の四十四）

（「自分を修養し百姓（万民）を安らかにするということは、聖天子の堯や舜でさえ苦労されたことだ。修己安人ということは大変難しいことなのだ、軽々しく言ってはいけない」と。）

## 【禹の治世 夏王朝】

さて、舜帝の後を継いだのは人望が最も厚かった家臣の禹<sup>う</sup>で、「夏<sup>か</sup>」という王朝を築き、王を称しました。歴史学的に中国最古を云々<sup>うんぬん</sup>される「夏王朝<sup>かおうちよう</sup>」がそれです。「夏王朝<sup>かおうちよう</sup>」の存在の有無は長い間学会で侃々<sup>かんかん</sup>諤々<sup>がくがく</sup>の論議がなされてきました。最近中国の国を挙げてのプロジェクトチームが、「夏王朝は存在した」という一応の終止符を打ちました。「史記」に記載されている記事や遺跡出土品の放射能測定、そして甲骨文字などの古代文書、天文に関する古書が決め手となって、成立年限や歴代王の在位期間を特定することができたということです。そのうち中学・高校の教科書に載るかもしれません。

それによれば、「夏王朝<sup>かおうちよう</sup>」の成立は紀元前二千七十年で、次の王朝である「殷王朝（商）」

により滅ぼされた紀元前千六百年までの四百七十年間だったことになります。

禹王も、舜帝の子である商均が不肖であるという理由で帝位を舜から禅譲されました。禹の父を鯀こんといいますが、鯀は黄河流域でしばしば起こる洪水の氾濫を防ぐ大役を堯帝や舜帝に命ぜられながら、遂に成功せず、その責任を取って処刑されました。鯀の後を受け継いで洪水対策責任者に就いたのが禹でした。禹は父の汚名挽回のために身を粉にして仕事に専念しました。「史記」にその奮闘ぶりを「身を勞し思いを焦がし、外に居ること十三年、家門を過ぐれども、敢えて入らず」と記されています。父親が誅罰ちゅうばつされた悲しみを無念に思い、家族から離れて工事現場に寝起きすること十三年。家の前を通っても立ち寄ることなく、洪水対策一筋に身を捧げた、ということです。その甲斐あって、治水に大きく効をおさめることができました。「論語」に禹を賞賛した文章があり、「史記」にそれが引用されています。

子曰わく、禹は吾れ間然かんぜん（非難すべき欠点）すること無し。飲食を菲うす（薄）くして孝を鬼神（天地の靈神）に致し、衣服を惡くして美を黻冕ふつべん（祭礼に着る前だれと冠）に致し、宮室きゅうしつを卑いやくして力を溝洫こうきよく（灌漑水路）に尽くす。禹は吾れ間然すること無し。（泰伯第八の二十一）

（先生が言われるには、「禹は私には非のうちどころがない。飲食を節し、孝の道を神々に尽くし、普段衣服は質素であっても、祭事の着衣は立派にし、住まいは粗末にして洪水対策に力を集中させた。禹は私には非のうちどころがない」と。）

禹王の時、酒を貢納した者があったが、飲んでみて美味すぎるとして、「後世必ず酒を以て国を滅ぼすものがあるだろう」と言ってこれを退けた、という言い伝えもあります。

禹には啓けいという優れた息子がいました。はじめ禹は、天下で最も人望があった皋陶こうようを挙げて禅譲を図ったのですが、皋陶が死去したため、益えきという重臣に王位を譲りました。そして禹が崩じて三年の喪があげると、益も他の諸侯も皆啓を推挙したため、断りきれず啓が遂に天子の位に即きました。それから約四百年余り、子孫が世襲して王統を継承します。

## 【桀王 夏王朝の滅亡】

「夏王朝」最後の王は桀王けつおうという暴君でした。桀王は不徳者で、生活は贅沢三昧。人民に重税をかけ、玉をちりばめた宮殿や樓台を造っては遊興に耽りました。末喜ぼつきという美女をことのほか溺愛し、彼女の言うことなら何でも従ってしまう。肉を山と積み、乾肉ほしにくを木の如くつるし、大きな池を掘ってこれに酒を満たし、そこに舟を浮かべて、太鼓をドンと鳴らすと三千人の宮廷人が裸で飛び込んで、牛のように酒を飲む姿を末喜と二人で眺めては狂喜していました。禹の心配した酒の害は桀王にあらわれてしまったのです。さらに関龍逢かんりゅうほうという賢臣が暴政や過度の遊興を見かねて諫言すると殺されてしまう始末。こんな

暴君ですから、国は乱れ、人民は喘ぎ、遂に諸侯が桀王追放に立ち上がりました。

亳という土地に湯という人徳ある大名がいました。湯がある日森に出てゆくと、一獵師が網を四方に張って祈っているのを見ました。「天地四方からくるものよ、総てこの網に入れ」と。湯は「なんてひどいことだ、鳥獸を総て一網打尽にしておもうとは」と言って、その獵師の網の三方を解き、改めて、「左へ行きたいものは左に行け。右に行きたいものは右に行け。それに従わないものはこの網にかかれ」と祈りました。この話が伝わるや、諸侯は「湯の徳至れり。禽獸（鳥獸）に及ぶ」と言ってその徳を讃え、湯を諸侯の旗頭に選出しました。そして湯は伊尹という名宰相（大臣）を用いて暴君・桀王を放伐（討伐・放逐）し、諸侯に推されて天子の位に即きました。

### 【湯王 殷王朝の創始】

湯王が創始した王朝を「殷王朝」又は土地の名にちなんで「商」といいます。紀元前千六百年頃の成立といわれています。「殷王朝」に関しては、たくさんの遺跡が発掘され、亀甲や牛骨等に刻まれた甲骨文字の解読も進み、文明の全容がかなり分かっています。興味のある方は、貝塚茂樹先生の「古代殷帝国」（みすず書房）や「古代中国」（講談社学術文庫）などで研究してみてください。ここでは割愛させていただきます。

さて湯王は「日新王」とも渾名される高德の王で、毎朝洗顔する洗面器に、「苟に日に新たに、日々に新たに、又日に新たなり」と刻んで日々の修養に励みました。善行を誇らず、罪は総て自分の責任である、という全責任を担当する強いリーダーシップを、身を以て示した天子です。「論語」に湯が桀王討伐に出陣する際、天に祈った言葉が載っています。

朕の躬に罪あらば、万方（万民）を以てすること無けん。万方罪あらば、罪は朕が躬に在らん。（堯曰第二十の一）

（天よ、我が身に罪があるときは、万民をわずらわさないでください。万民に罪のあるときは、罪を我が身に負わせてください）

湯王が崩зると、皇太子が続けて亡くなったため、宰相の伊尹が王の摂政として政治を取り仕切りました。その摂政ぶりは毅然としていて、太甲という王に至っては、太甲が不明・暴虐で湯王の法を守らないので、伊尹は彼が王であるにもかかわらず、一次的に放逐して、彼が改心したのを確認してから再び王位に迎えております。伊尹や先の舜の時代の皋陶は、後世までその名の聞こえた名臣で、「論語」でも、孔子が二人の存在ぶりを次のように褒め称えております。

舜、天下を有ち、衆に選んで皋陶を挙げしかば、不仁者は遠ざかれり。湯、天下を有ち、衆に選んで伊尹を挙げしかば、不仁者は遠ざかれり。（顔淵第十二の二十二）



( 舜が天下を保ち、大勢の中から選んで皋陶を抜擢したので、不仁者は遠ざかったのだ。  
湯が天下を保ったときも、大勢の中から伊尹を抜擢したので、不仁者は遠ざかったのだ )

### 【紂王 殷王朝の滅亡】

このようにして名君・湯王や名宰相・伊尹を得てスタートした「殷王朝」も時代が降るにつれてほころびが出はじめます。途中に太戊、武丁と言った中興の宗も現れたのですが、暴君として先の「夏王朝」の桀王と合わせて「桀紂」と並び称せられる悪玉・紂王の代で「殷王朝」も滅亡します。紀元前千五十年頃のことで、「殷王朝」の寿命は約五五〇年ということになります。

紂王は「史記」によれば、「生まれつき能弁で行動は敏捷、見聞に敏く、才力は他人に勝り、素手で猛獣を倒すほどであった。悪知恵があって、諫言するものがあればかえってやり込め、口達者で黒いものも白いと押し通してしまう。自分に能力があることを臣下に誇り、天下に自分より優れた者はいない、と高ぶった」とあります。更に、桀王に似て酒を溺れるほど飲み、女好きで妲己という美女を寵愛し、妲己の言うことは何でも聞きました。卑猥な音楽を作らせ、賦税を重くし、鹿臺という高殿に多くの金を蓄え、多くの奇物や野獣飛鳥を集めては、広大な庭園に放ち飼って遊興に耽りました。そして桀王同様に「酒池肉林」という熟語が生まれるもとになった、「酒を注いで池とし肉を懸けて林」とし、男女を裸にして、その間を駆けさせ、長夜の飲を為す(一晩中酒宴を張ること)始末。こんな暴君ですから民衆は怨み、諸侯の中にも叛く者が出てきました。すると紂王は、「炮烙の刑」といって銅の柱に油を塗り、炭火で焚いて罪人にその上を渡らせ焚死させる刑罰にかけました。

紂の悪政を見かねた腹違いの兄である微子はしばしば諫めますが一向に聞かれない。遂に国外に逃亡します。叔父の比干は「人臣たるものは死を以て諫めなければならぬ」と紂王を強く諫めたが、紂は「聖人の心(胸)には七つの穴があるということだが、ほんとうだろうか」と嘯いて比干の心臓をくりぬいて殺してしまいます。もうひとりの叔父である箕子は恐れて狂人を装い奴隷となりました。まあ何という非道の君主だ！

「論語」に、孔子が微子、比干、箕子の三人はやりかたはそれぞれ違っても、国を憂え民を愛する至誠の人であった、として「殷に三仁人あり」と回想し、賞賛している文章があります。

微子はこれを去り、箕子はこれが奴(隸)となり、比干は諫めて死す。孔子曰く、殷に三仁人あり。(微子第十八の一)

### 【武王 周王朝の創始】

紂王のような悪玉がいつまでも栄えるわけがない。遂に周の武王という大名に討伐され、「殷王朝」は滅亡します。孔子が夢にまで見て慕った宰相・周公のいた、諸国の模範たるに最も相応しい文明国家と信じた「周王朝」の創りです。

紂王を滅ぼした武王の父を西伯・文王、祖父を季歴、曾祖父を古公亶父（太公）といいます。この一族はみな有徳者の家系でした。古公亶父は始め豳という小国の首長でした。時に匈奴・戎狄という辺境の異民族が、強欲にも財貨を要求してきたのでそれを与えると、彼らはさらに土地と庶民を要求してきました。国民は怒り、戦おうと言いましたが古公亶父は「人の父子を殺して首長であることは、私には忍びない」と戦いを避けて、岐山という土地に家族を連れて移ってしまいました。すると古公亶父の恩徳を慕う老若男女総てが、国を挙げて悉く岐山に移り住んだということです。

古公亶父には息子が三人おりました。末っ子の季歴が昌、後の西伯・文王を生みます。その時聖人たる瑞祥が現れたので、古公亶父は「我が子孫に、きっと興隆する者が出る。おそらくこの孫かもしれない」と思い、世継ぎを昌にしたいと望みました。二人の兄はそれを知り、気持ちよく家督を季歴に譲って、自分たちは南の地方に逃げ隠れしてしまいました。

季歴が死ぬと、昌が家督を継ぎ、首長に即位して西伯と称しました。瑞祥通り西伯は善を積み徳を重ねました。先祖の遺徳を慕い、仁政を敷き、老人を敬い年少者を慈しみ、賢者を尊んで彼らを礼遇するのに食事も惜しんで対応しました。従って有能な人々がたくさん集まりました。後述する伯夷と叔斉という孤竹国の公子たちも、兄弟で国を譲り合い、次男坊に跡継ぎを任せ、西伯がよく老人を労わると聞いて周に亡命してきます。

西伯は何事も公正に処理したので、諸侯は争い事があると、みな西伯に訴えて仲裁を依頼しました。ある時、虞と芮という二国の間で争訟が起き、決着がつかないので、西伯に決めてもらおうと西伯のいる周の国にやってくると、周の境界に入るや、田を耕す者はみな畦を譲り合っていました。それを見た二国の人々は恥じて、西伯に会うのを取りやめ急遽国に帰り、お互い譲歩し合って争訟を決着しました。それを聞いた諸侯は、「西伯こそ天命を受けた君主に違いない」と語り合った、といいます。

さて、時は「殷王朝」末期の紂王の時です。西伯が人望を得て国土も日増しに広がってくると、西伯に全くその気がなくても、周の隆盛を嫉む輩がいて紂王に「諸侯はみな西伯に心を向けています。このまま放っておくと謀反を起こすかもしれません」と讒言（いつわり告げ口）され羑里という所に囚われます。が、賢臣たちが紂王にたくさんの贈り物を献じたので許されて帰国しました。「論語」にこのころの周の徳を誉めた孔子の言葉が載っています。

孔子曰く、「文王、西伯となりて」天下を三分して其の二を有ち、以て殷に服事す。周の徳は、其れ至徳と謂うべきのみ。（泰伯第八の二十）

（孔子先生が言われるには、西伯・文王は、諸国の旗頭となり、天下を三つに分けたそ

の二つを所有しながら、尚、殷に従って仕えていた。周の徳はまあ最高の徳だと言っているだろう、と)

西伯は姜里に囚われている時、「易」の八卦を敷衍して六十四卦へと発展させ、現在一般に流布している「周易」の元祖であるとも言われています。在位およそ五十年で死去し、皇太子の発、すなわち武王が即位しました。

「論語」に「武王には優れた臣下が十人いた」(泰伯篇)とあります。それは、武王の弟の周公旦であり太公望呂尚などです。武王は文王が病没して即位するとすぐに、彼らを率いて、「牧野の戦い」で大激戦の末、遂に悪逆非道の紂王を攻め滅ぼして「周王朝」を樹立しました。紀元前千五百年頃のこと、この王朝は約八百年も続きました。

太公望呂尚は現在の山東省の出で、若い頃貧乏しながらも大志を抱き、兵法の研究に明け暮れていました。かつて紂王に仕えていましたが、その無道ぶりに愛想を尽かし、そこを去って諸国を遊説して回ったけれど、諸侯に知遇を得るところがありません。呂尚はいつしか年老いてしまいました。西伯・文王が老人をよく養うと聞いて、文王のいる周にやってきて毎日釣り糸を垂らして時の到来を待っていました。

ある日、文王が狩にでる時占いをしたら、「今日の獲物は竜でもなく虎でもなく熊でもない。獲る物は覇王の補佐役である」と出ました。文王が獵にでると、渭水という川の岸で一人の老人が釣りをしているのに出会いました。話をしてみると、大変博識で天下の情勢にも通じている。文王は「貴方こそかねて私の先君・太公が望み求めておられた方である」と言って、呂尚に太公望と名づけ、これを大臣にしました。(この故事から釣師のことを太公望というのです) 太公望呂尚は、文王亡き後も武王に仕え、軍事面の参謀役として紂王討伐に多大な貢献をしました。後に「齊」という商業大国の始祖になります。

一寸横道にそれますが、その紂王討伐の時のことです。武王が父・文王の位牌を載せ、軍を率いて紂のいる東方を目指して進軍していると、突然飛び出してきて、武王の馬の手綱をつかんで、行く手を阻み諫言する者がいました。文王を慕って周に亡命してきた孤竹国の公子、伯夷と叔齊です。曰わく、「父君が亡くなられて喪を済ますこともせず戦争に及ぶとは孝と言えましょうか。又、殷の君主を臣下である者がこれを弑すのは仁と言えましょうか」と。左右の者たちは狼藉者なりとして二人を斬り殺そうとしましたが、太公望は「この二人は義人だ」と言って救い諭して去らせました。

やがて武王が殷を倒して「周王朝」が創始されると、伯夷と叔齊は「周の粟食らわず」と言って首陽山に隠れ、蕨を採って暮らしました。飢え死にする間際に、「我々は首陽山に登り蕨を採って食った。武王が暴力を以て紂の暴力に代えただけなのに、自らの非を知らぬからだ。神農氏や舜・禹のような理想的な時代は忽焉と消えてしまった。ああ、我等どこに身を寄せるべきか。運命も衰えたことよ」と歌って遂に餓死してしまいました。

「論語」・述而篇に、冉有という弟子が、伯夷と叔齊は国を次男坊に譲ったり、首陽山で餓死したことを怨んでいるでしょうか、と尋ねる場面があります。又、公冶長篇にも同様

の場面があります。孔子は次のように答えました。

(子)曰わく、仁を求めて仁を得たり。又何ぞ怨みん。(述而第七の十四)

子曰わく伯夷<sup>はく い</sup>叔斉<sup>しゅくせい</sup>は旧悪<sup>おも</sup>を念<sup>まね</sup>はず。怨み是れをもつて希<sup>まれ</sup>なり。(公治長第五の二十三)

伯夷<sup>はく い</sup>と叔斉<sup>しゅくせい</sup>は義人<sup>ぎじん</sup>(堅く正義を守る人)だ、だから自分たちの納得してやったことに後悔<sup>くわいご</sup>なぞする人たちではない。古の賢人というべき二人である。それだから、

伯夷<sup>はく い</sup>・叔斉<sup>しゅくせい</sup>、首陽の下に餓う。民、今に至るまでこれを称す。(季子第十六の十二)

伯夷<sup>はく い</sup>と叔斉<sup>しゅくせい</sup>は、暴力を以て暴力を易<sup>か</sup>える武王に反抗して首陽山で餓死はした。しかし、自分たちの信念に死を賭した生き方は、義人たるに相応<sup>ふさわ</sup>しいではないか。だからこそ今日までその徳を、皆が褒め称えているではないか、と。

伯夷と叔斉は、孔子の「志士仁人<sup>し しじん</sup>は、身を殺して以て仁を為すこともある」(衛霊公篇)という理想の人物像の一角を占めていることがわかります。唐の時代の文章家で詩人の韓愈<sup>かんゆ</sup>という人も、「伯夷の頌<sup>しょう</sup>(伯夷を讃えることば)」を作り、世に特立独行の精神に満ちた豪傑は多いが、天下を敵にまわして、武王・周公という聖人を非難した義人は、伯夷・叔斉ぐらいなもんだ。今時の連中ときたら、一人に誉められれば有頂天になり、一人にけなされればクシュンとなる。少しは伯夷・叔斉に見習いたいものだ、と讃えました。

太公望の話に続いて、どうしても語っておかなくてはならないのが、武王の弟である周公<sup>しゅうこう</sup>旦<sup>たん</sup>のことです。周公旦を普通「周公」と呼びます。周公は、理想に燃えていた若い頃の孔子が、夢にまで見て慕った聖人宰相<sup>じやうつじへん</sup>です。述而篇に、既に年老いた孔子の慷慨<sup>かうがい</sup>(嘆き)が載っています。

子曰わく、甚だしいかな、吾が衰えたるや。久し、吾れ復た夢に周公を見ず。(述而第七の五)

(先生が言われるには、「ああひどいものだ、私の衰えも。久しいことだ、私が周公の夢を見なくなってから」 と)

西伯・文王にはたくさんの子供がいましたが、歴史上関係のある者を挙げれば、長男の武王、三男・管叔<sup>かんしゅく</sup>、四男・周公、五男・蔡叔<sup>さいしゅく</sup>です。周公は特に抜きん出て優れ、武王とも相性がよく、太公望呂尚<sup>しやうこうせき</sup>や召公奭<sup>しやうこうせき</sup>といった重臣たちと力を合わせ、周王朝の礎<sup>いしづえ</sup>作りに奔走<sup>ほんそう</sup>しました。紂王<sup>ちゆうわう</sup>放伐後、周公は魯国、太公望は齊国、召公は燕<sup>えん</sup>国の国主に命ぜられています。

周公に関する記事は「書経<sup>しよきやう</sup>」をはじめ色々な文献に載っていますが、ここでは主として

「史記」の「周本紀」「魯周公世家」、そして「論語」に登場する四章をもとに簡単に紹介しておきます。

周公は幼少の頃から孝公息子で、篤く仁徳を志し、学問に長じ、大勢いる兄弟を抜きん出て優れておりました。武王の補佐役として政務を担当するに当っては、「天が味方をしてくれるのはただ徳あるものにだけ。人民が懐くのは恩恵あるものにだけ。善政の要諦は国内を安定させること」との信条に従って、民衆の安寧をひたすら願い、自分の身を質実・節儉に置いて、賢人を諸国から招き、「周王朝」創始の初志を忘れず、終始緊張感をもって王朝文化の発展と継続に力を注ぎました。

武内義雄著「儒教の精神」(岩波新書)によれば、周公が道徳的に重視した思想は、親子の情愛と兄弟の友愛で、「孝」と「友」という倫理概念を人間道徳の根本に据えました。

そして「孝」の概念を政治制度の上で取り入れ、殷王朝時代に行われていた兄弟相続法を廃止して嫡子相続法を制定しました。そしてそれに伴って、兄弟が相続権を失う弊害を分家制度を創設することにより「友」の概念を保つということを考案したのも周公で、後にこの分家が諸侯となって「封建制度」に発展します。

「殷王朝」を制圧してから二年後、政治がようやく軌道に乗るかという時に、武王が病に倒れます。臣下の者たちが動揺して占いを立てようとすると、周公はそれを止め、自分の身を犠牲に捧げて武王の快癒を祈りました。翌日武王の病は癒えました。

やがて武王が崩じます。周公は自分が制定した嫡子相続法に則り、武王のまだ幼い長男・誦を立てて、二代目を継がせました。これが成王です。周公は幼帝・成王の摂政として王朝を輔翼するため、自分に代わって息子の伯禽を封国の魯公に就任させ、自分は首都に残りました。周公が伯禽を自分の名代として魯国に就任させるときの「四ヶ条の訓戒」が「論語」微子篇に載っています。

周公、魯公(伯禽)に謂いて曰わく、「一・親族を大事にせよ 二・大臣から彼らの意見が用いられないと言って怨まれぬようにせよ 三・昔から因縁ある者は、大過なければ見捨てるな 四・備わるを一人に求むること無かれ」と。(微子第十八の十)

「備わるを一人に求むること無かれ」というのは、「人を使うに際しては一人の人間に何もかも要求してはいけない」又は「完璧を期待してはいけない」。要するにこの四ヶ条は、親族・大臣・縁故者を大切にし、意見を十分聞いて善きものは取り上げ、一人ひとりに過剰の期待・要求をせず、衆知を結集して国家を治めよ、と訓えているようです。

「史記・魯周公世家」にも有名な「捉髮吐哺」という熟語が生まれた故事が載っています。「周公、伯禽を戒めて言うには、私は文王の子で武王の弟、現在の成王にとっては叔父にあたる国家の重役である。その私でさえ、天下の賢人を失ってはならぬと、人が訪ねてくると、一度沐浴して洗髪する間にも、三度中断して髪を捉り(一沐三捉髮)、一度の食事中に、食べかけのものを三度吐き出して(一飯三吐哺)、人と会っているのだ。それほど気を

使っても、まだ優れた人物を見逃しているのではないかと心配でならない。お前も魯公となったからには、国君だからといって決して驕<sup>おご</sup>ってはならぬ」と。教え深い言葉です。

こんな優れた名宰相・周公が摂政した時代ですから、一時、管叔・蔡叔の兄弟が他人にそそのかされて周公排斥騒動が起りましたが、すぐに治まり、周公は次々と後世の模範となる礼法諸制度や井田法の改善など新しい改革に手を染め、「周王朝」の全盛時代を築きました。孔子の理想的政治モデルはまさにこの偉大な周公の治世にありました。「八佾<sup>はちいつへん</sup>篇」に次の言葉があります。

子曰わく、周は二代<sup>か いん</sup>（夏と殷）に監<sup>かんが</sup>みて郁郁<sup>いくいくこ</sup>乎として文なるかな。吾は周に従わん。（八佾第三の十四）

（先生が言われるには、「周の文化は、夏と殷の二代を参考にして発展させた。いかにもはなやかで立派だ。私は周に従おう」と）

#### 【幽王 周王朝の東遷】

さて、「老子」という書物に「物は壮<sup>さかん</sup>なれば則<sup>すなわ</sup>ち老ゆ」という言葉があるように、全盛期があれば衰退期があるのは物の道理です。さしも太平を謳歌した「周王朝」も、途中で暴虐無道の厲王<sup>れいおう</sup>が太平を乱し、共和時代を経て、宣王<sup>せんおう</sup>が周室を中興するという変転があった、十代目の幽王<sup>ゆうおう</sup>になると王朝滅亡の危機に遭遇しました。原因は幽王の女性問題です。

幽王は褒姒<sup>ほうし</sup>という美人を寵愛しました。が、この寵妃<sup>ちようひ</sup>は何があっても笑わない性質で、彼女の笑顔を目みたい幽王は色々やってみるが一向に笑わない。そこで一策を案じたのが烽火作戦<sup>のろし</sup>です。当時辺境の外敵が侵入すると烽火をあげて諸侯の応援を求める取り決めがありました。幽王は、外敵がこないのに烽火をあげさせました。諸侯が「すわ一大事」と都に馳せ参じてみると、都はどこ吹く風かという静けさ。諸侯が拍子抜けした顔つきをしているのを、褒姒が高殿で見えて始めて笑った。幽王が喜んでしばしばこれをやるので諸侯は誰も信用しなくなりました。その後辺境の異民族犬戎<sup>けんじゅう</sup>が攻めてきた時、烽火を上げて救援を求めたが誰も駆けつけず、幽王は驪山<sup>りやま</sup>の下で殺害されてしまいました。

次の平王は、遂に都を保てず、東の洛陽に遷都しました。これを「周室の東遷」といい、紀元前七百七十年のことです。そしてこれまでの王朝を「西周王朝」、洛陽に都した周が紀元前五六年に秦に亡ばされるまでを「東周王朝」と呼びます。さらに、「東周王朝」は、「春秋時代」と「戦国時代」に分けられます。「春秋時代」は、孔子が編纂したといわれる魯国の年代記「春秋」に基づいた年代区分で、歴史的には紀元前七百七十年から紀元前四百三年までとされます。この章の冒頭で述べたように、孔子は紀元前五百五十二年頃から四七九年に生存した人ですから、歴史はいよいよ「論語」の主人公・孔子が登場する時代に近づきました。